

校異源氏物語・あふひ

世の中かはりて後よろつものうくおほされ御身のやむことなさもそふにやかる
くしき御しのひありきもつゝましうてこゝもかしこもおほつかなさのなけき
をかさね給ふむくひにやなをわれにつれなき人の御心をつきせすのみおほしな
けく今はましてひまなうたゝ人のやうにてそひおはしますをいまきさきは心や
ましうおほすにやうちにのみさふらひ給へはたちならふ人なう心やすけなりお
りふしにしたかひては御あそひなどをこのましう世のひゝくはかりせさせ給つ
ゝ今の御ありさましもめてたしたゝ春宮をそいとこひしう思ひきこえ給御うし
ろみのなきをうしろめたうおもひきこえて大將の君によろつきこえつけ給ふも
かたはらいたきものからうれしとおほすまことやか六条のみやす所の御はら
のせむ坊のひめ君さい宮に給にしかは大將の御心はへもいとたのもしけなき
をゝさなき御有さまのうしろめたさにことつけてくたりやしなましとかねてよ
りおほしけり院にもかゝることなむときこしめしてこ宮のいとやむことなくお
ほしときめかしたまひしものをかるくしうをしなへたるさまにもてなすなる
かいとおしきこと齋宮をもこのみこたちのつらになむおもへはいつかたにつけ
てもおろかならさらむこそよからめ心のすさひにまかせてかくすきわさするは
いとよのときおひぬへきこと也なと御けしきあしければわか御こゝちにもけ
にとおもひしらるればかしこまりてさふらひ給人のためはしかましき事なくい
つれをもなたらかにもてなして女のうらみなおひそとの給はするにもけしから
ぬ心のおほけなさをきこしめしつけたらむときとおそろしければかしこまりて
まかて給ぬ又かく院にもきこしめしのたまはするに人の御名も我ためもすきか
ましういとおしきにいとゝやむことなくくるしきすちには思きこえ給へとま
たあらはれてはわさともてなしきこえ給はす女もにけなき御としのほとをはつ
かしうおほして心とけ給はぬけしきなればそれにつゝみたるさまにもてなして
院にきこしめしいれ世中の人もしらぬなくなりたるをふかうしもあらぬ御心
の程をいみしうおほしなけきけりかゝる事をきゝ給にもあさかほのひめ君はい
かて人になしとふかうおほせはゝかなきさまなりし御返なともおさくゝなしさ
りとして人にくゝはしたなくはもてなし給はぬ御けしきを君も猶こと也とおほし

わたるおほ殿にはかくのみさためなき御心を心つきなしとおほせとあまりつゝ
まぬ御けしきのいふかひなければにやあらむふかうもえしきこえ給はす心くる
しきさまの御心ちになやみ給て物心ほそけにおほいたりめつらしくあはれとお
もひきこえ給たれもくうれしきものからゆゝしうおほしてさまくの御つゝ
しみせさせたてまつり給かやうなる程にいとゝ御心のいとまなくておほしおこ
たるとはなけれどとたえおほかるへしそのころ齋院もおりの給てきさきはらの
女三の宮ゐ給ぬみかときさきとことにおもひきこえ給へる宮なればすちことに
なり給をいとくるしうおほしたれとこと宮たちのさるへきおはせすきしきなど
つねのかむわさなれといかめしうのゝしるまつりのほどかきりあるおほやけこ
とにそふことおほくみどころこよなし人からとみえたりこけいの日上達部など
かすたまりてつかうまつり給わさなれとおほえことにかたちあるかきりした
かさねの色うへのはかまのむむまくらまでみなどゝのへたりとりわきたるせ
むしにて大将の君もつかうまつり給かねてより物見車心つかひしけり一条のお
ほち所なくむくつけきまでさはきたり所くの御さしき心くにしつくしたる
しつらひ人の袖くちさへいみしきみものなり大殿にはかやうの御ありきもおさ
くし給はぬに御心ちさへなやましかければおほしかけさりけるをわかき人とい
てやをのかとちひきしのひてみ侍らむこそはへなかるへけれおほよそ人たにけ
ふのものみには大将殿をこそはあやしき山かつさへみたてまつらんとすなれと
をきくにくによりめこをひきくしつゝもまうてくなるを御らむせぬはいとあま
りも侍かなといふを大宮きこしめして御こゝちもよろしきひま也さふらふ人ゝ
もさうくしけなめりとてにはかにめくらしおほせ給てみ給日だけ行てきしき
もわさとならぬさまにていてたまへりひまもなうたちわたりたるによそをしう
ひきつゝきてたちわつらふよき女房車おほくてさふさふの人なきひまをおもひ
さためてみなさしのけさする中にあんしろのすこしなれたるかしたすたれのさ
まなとよしはめるにいたうひきいりてほのかなる袖くちものすそかさみなとも
のゝ色いときよらにてことさらにやつれたるけはひしるくみゆる車ふたつあり
これはさらにさやうにさしのけなとすへき御車にもあらずとくちこはくて手ふ
れさせすいつかたにもわかき物ともゑひすきたちはきたるほどの事はえした
ゝめあへすおとなくしきこせむの人ゝはかくななといへとえとゝめあへすさ
い宮の御はゝみやす所ものおほしみたゝゝなくさめにもやとしのひていてたま
へる也けりつれなしつくれとをのつからみしりぬさはかりにてはさないはせそ
大将殿をそかうけにはおもひきこゆらむなといふをその御かたの人もしれば

いとおしとみなからよいせむもわつらはしければしらすかほをつくるつるに
御車ともたてつゝけつれば人たまひのおくにをしやられて物もみえす心やまし
きをはさる物にてかゝるやつれをそれとしられぬるかいみしうねたき事かきり
なししちなともみなをしおられてすゝろなる車のとうにうちかけたれは又なう
人わろくくやしうなにゝきつらんとおもふにかひなしものもみてかへらんとし
たまへとおりにてんひまもなきにことなりぬといへはさすかにつらき人の御
まへわたりのまたるゝも心よはしやさゝのくまにたにあらねはにやつれなくす
き給につけても中々御心つくしなりけにつねよりもこのみとゝのへたる車と
もの我もくゝとのりこほれたるしたすたれのすきまともゝさらぬかほなれとほ
をゑみつゝしりめにとゝめ給もありおほ殿のはしるければまめたちてわたり給
御ともの人々うちかしこまり心はへありつゝわたるをしけたれたるありさま
こよなうおほさる

かけをのみみたらし河のつれなきに身のうきほとそいとしらるゝと涙の
こほるゝを人のみるもはしたなけれとめもあやなる御さまかたちのいとゝしう
いてはへをみさらましかはとおほさるほとくにつけてさうそく人のありさま
いみしくとゝのへたりとみゆるなかに上達部はいとことなるをひと所の御ひ
かりにはをしけたためり大将の御かりのすいしんに殿上のそうなどのするこ
とはつねのことにもあらすめつらしき行幸などのおりのわさなるをけふは右近
のくら人のそうつかうまつれりさらぬみすいしんとももかたちすかたまはゆく
とゝのへて世にもてかしつかれ給へるさま木草もなひかぬはあるましけなりつ
ほさうそくなといふすかたにて女はうのいやしからぬや又あまなどの世をそむ
きけるなともたうれまどひつゝ物見にいてたるもれいはあなかなりやあなに
くとみゆるにけふはことほりにくうちすけみてかみきこめたるあやしのもの
ともの手をつくりてひたいにあてつゝみたてまつりあけたるもおこかましけな
るしつのおまてをのかかほのならむさまをはしらてゑみさかへたりなにとみ
いれ給ましきゑせす両のむすめなどさへ心のかきりつくしたる車ともにのりさ
まことさらひ心けさうしたるなむおかしきやうくのみものなりけるましてこ
ゝかしこにうちしのひてかよひ給所くは人しれすのみかすならぬなけきまさ
るもおほかり式部卿の宮さしきにてそみたまひけるいとまはゆきまてねひゆく
人のかたちかな神などはめもこそとめ給へとゆゝしくおほしたりひめ君はとし
ころきこえわたり給御心はへのよの人にゝぬをなのめならむにてたにありまし
てかうしもいかてと御心とまりけりいとゝちかくてみえむまてはおほしよらす

わかき人ゝはきゝにくきまてめてきこえあへりまつりの日はおほ殿にはものみ
給はず大將の君かの御車の所あらそひをまねひきこゆる人ありければいとく
おしうしとおほしてなをあたをりかにおはする人のものになさけをくれ
すくくしき所つき給へるあまりに身つからはさしもおほさゝりけめともかゝ
るなからひはなさけかはすへき物ともおほいたらぬ御をきてにしたかひてつき
くよからぬ人のせさせたるならむかしみやす所は心はせのいとはつかしくよ
しありておはする物をいかにおほしうむしにけんといとおしくてまうて給へり
けれどさい宮のまた本の宮におはしませはさかきのはゝかりにことつけて心や
すくもたいめむしたまはすことはりとはおほしなからなそやかくかたみにそは
くしからておはせかしとうちつふやかれ給けふは二条院にはなれおはしてま
つりみにいて給にしのたいにわたり給てこれみつに車の事おほせたり女房いて
たつやとの給てひめ君のいとうつくしけにつくろいたてゝおはするをうちゑみ
てみたてまつり給君はいさたまへもろともにみむよとて御くしのつねよりもき
よらにみゆるをかきなて給てひさしうそき給はさめるをけふはよき日ならむか
しとてこよみのはかせめしてときとはせなとし給ほとにまつ女房いてねとてわ
らはのすかたとものおかしけなるを御らむすいとらうたけなるかみとものすそ
はなやかにそきわたしてうきもむのうへのはかまにかゝれるほとけさやかにみ
ゆ君の御くしはわれそかむとてうたて所せうもあるかないかにおひやらむとす
らむとそきわつらひ給いとなかき人もひたいかみはすこしみしかうそあめるを
むけにをくれたるすちのなきやあまりなさけなからむとてそきはてゝちひろと
いはひきこえ給を少納言あはれにかたしけなしとみたてまつる

はかりなきちひろのそのみるふさのおひゆくすゑはわれのみそみむとき
こえたまへは

ちひろともいかてかしらむさためなくみちひるしほのゝとけからぬにとも
のかきつけておはするさまらうくしき物からわかうおかしきをめてたしと
おほすけふも所もなくたちにけりむまはのおとゝのほとにたてわつらひてかむ
たちの車ともおほくてものさはかしけなるわたりかなとやすらひ給によろし
き女車のいたうのりこほれたるよりあふきをさしいてゝ人をまねきよせてこゝ
にやはたゝせ給はぬ所さりきこえむときこえたりいかなるすき物ならむとおほ
されて所もけによきわたりなれはひきよさせ給ていかてえ給へる所そとねた
さになんどのたまへはよしあるあふきのつまをおりて

はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふをまちけるしめのう

ちにはとあるてをおほしいつれはかの内侍のすけなりけりあさましうふりかた
くもいまめくかなとにくさにはしたなう

かさしけるこゝろそあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを女はつ
らしと思きこえけり

くやしきもかさしけるかななのみして人たのめなる草葉はかりをときこゆ
人とあひのりてすたれをたにあげ給はぬを心やましうおもふ人おほかり一日の
御ありさまのうるはしかりしにけふうちみたれてありき給かしたれならむのり
ならふ人けしうはあらしはやとをしはかりきこゆいとましからぬかさしあらそ
ひかなとさうくしくおほせとかやうにいとおもなからぬ人はた人あひのり給
へるにつゝまれてはかなき御いらへも心やすくきこえんもまはゆしかしみやす
所は物をおほしみたるゝ事としころよりもおほくそひにけりつらきかたにおも
ひはて給へといまはとてふりはなれくたりたまひなむはいと心ほそかりぬへく
よの人きゝも人わらへにならんことゝおほすさりとてたちとまるへくおほしな
るにはかくこよなきさまにみな思ひくたすへかめるもやすからすつりするあま
のうけなれやとおきふしおほしわつらふけにや御心ちもうきたるやうにおほさ
れてなやましうし給大將殿にはくたり給はむ事をもてはなれてあるまじきこと
などもさまたけきこえ給はすかすならぬ身をみまうくおほしすてむもことはり
なれといまは猶いふかひなきにても御らんしはてむやあさからぬにはあらんと
きこえかゝつらひ給へはさためかねたまへる御心もやなくさむとたちいて給へ
りしみそき河のあらかりしせにいとゝよろついとくおほしいれたり大殿には
御ものゝけめきていたうわつらひ給へはたれもくおほしなけく御ありきな
とひむなき比なれば二条院にもときくそわたり給さはいへとやむことなきか
たはことに思きこえたまへる人のめつらしき事さへそひ給へる御なやみなれば
心くるしうおほしなきてみすほうやなにやなとわか御かたにておほくおこな
わせ給ふものゝけいきすたまなといふものおほくいてきてさまくのなのりす
る中に人にさらにうつらすたゝ身つからの御身につとそひたるさまにてことに
おとろくしうわつらはしきこゆることもなけれと又かたときはなるるおりも
なき物ひとつありいみしきけんさともにしたかはすしうねきけしきおほろけ
のものにあらずとみえたり大將の君の御かよひ所こゝかしことおほしあつるに
このみやす所二条の君などはかりこそはをしなへてのさまにはおほしたらさめ
れはうらみの心もふかゝらめとささめきてものなとはせ給へとさしてきこえ
あつることもなしものゝけとてもわさとふかき御かたきときこゆるもなしすき

にける御めのとたつ人もしはおやの御かたにつけつゝ、つたはりたるものゝよは
めにいてきたるなどむねくしからすそみたれあらはるゝたゝつくくどねを
のみなき給ておりくはむねをせきあけつゝ、いみしうたへかたけにまとふわさ
をし給へはいかにおはすへきにかとゆゝしうかなしくおほしあはてたり院より
も御とふらひひまなく御いのりのことまでおほしよらせ給さまのかたしけなき
につけてもいとゝおしけなる人の御身世世の中あまねくおしみきこゆるをきゝ
給にもみやす所はたゝならすおほさるとしころはいとかくしもあらさりし御い
とみ心をはかなかりし所の車あらそひに人の御心のうききにけるをかのどのに
はさまでもおほしよらさりけりかゝる御物おもひのみたれに御心ち猶れいなら
すのみおほさるればほかにわたり給てみすほうなとせさせ給大将殿きゝ給てい
かなる御心ちにかといとおしうおほしをこしてわたり給へりれいならぬたひ所
なれはいたうしのひ給心よりほかなるおこたりなとつみゆるされぬへきこえ
つゝ、け給てなやみ給人の御ありさまもうれへきこえ給身つからはさしも思われ
侍らねとおやたちのいとことくしうおもひまとはるるか心くるしきにかゝる
ほとをみすくさむとてなむよろつをおほしのとめたる御心ならはいとうれしう
なむなとかたらひきこえ給つねよりも心くるしけなる御けしきをことほりにあ
はれにみたてまつり給うちとけぬあさほらけにいて給御さまのおかしきにも猶
ふりはなれなむ事はおほしかへさるやむことなきかたにいとゝ心さしそひ給へ
きこともいてきにたれはひとつかたにおほししつまり給なむをかやうに待きこ
えつゝ、あらむも心のみつきぬへき事中くもの思のおとろかさるゝ心ちし給に
御ふみはかりそくれつかたある日ころすこしおこたるさまなりつる心ちのには
かにいといたうくるしけに侍るをえひきよかてなむとあるをれいのことつけと
みたまふ物から

袖ぬるゝ恋ちとかつはしりなからおりたつたこの身つからそうき山の井の
水もことほりにとそある御てはなをここの人の中にすくれたりかしとみ給ひ
つゝ、いかにそやもある世かな心もかたちもとくしにすつへくもなく又おもひ
さたむへきもなきをくるしうおほさる御かへりいとくらうなりにたれと袖のみ
ぬるゝやいかにふかゝらぬ御事になむ

あさみにや人はおりたつわかたは身もそほつまでふかき恋ちをおほろけ
にてやこの御かへりをみつからきこえさせぬなとありおほ殿には御ものゝけい
たうおこりていみしうわつらひ給この御いきすたまこちゝおとゝの御らうなど
いふものありときゝ給につけておほしつゝ、くれは身ひとつのうきなききよりほ

かに人をあしかねなとおもふ心もなけれと物おもひにあくかるなるたましゐは
さもやあらむとおほししらるゝこともありとしころよろつに思ひのこすことな
くすくしつれとかうしもくたけぬをはかなき事のおりに人のおもひけちなきも
のにもてなすさまなりしみそきの後一ふしにおほしうかれにし心しつまりかた
うおほさるゝけにやすこしうちまどろみ給夢にはかのひめ君とおほしき人のい
ときよらにてある所にいきてとかくひきまさくりうつゝにもにすたけういかき
ひたふる心いてきてうちなくなるなどみえ給事たひかさなりにけりあな心うや
けに身をすてゝやいにけむとうつし心ならすおほえ給おりくもあれはさなら
ぬ事たに人の御ためにはよさまのことをしもいひいてぬ世なれはましてこれは
いとういひなしつへきたよりなりとおほすにいとなたたしうひたすら世にな
くなりて後にうらみのこすはよのつねのこと也それたに人のうへにてはつみふ
かうゆゝしきをうつゝの我身なからさるうとましきことをいひつけらるゝすく
せのうきことすへてつれなき人にいかて心もかけきこえしとおほしかへせとお
もふも物をなりさい宮はこそうちにいり給へかりしをさまくさはる事ありて
この秋入給九月にはやかてのゝ宮にうつろひ給へければふたゝひの御はらへの
いそきとりかさねてあるへきにたゝあやしうほけくしうてつくくどふしな
やみ給を宮人いみしきたいしにて御いのりなとさまくつかうまつるおとろ
くしきさまにはあらずそこはかとなくて月日をすくし給大将殿もつねにとふ
らひきこえ給へとまさるかたのいたうわつらひ給へは御心のいとまなけなりま
たさるへきほとにもあらずとみな人もたゆみ給へるにはかに御けしきありて
なやみ給へはいとゝしき御いのりかすをつくしてせさせ給へれとれいのしうね
き御ものゝけひとつさらにうこかすやむことなきけむさともめつらか也ともて
なやむさすかにいみしうてうせられて心くるしけになきわひてすこしゆるへ給
へや大将にきこゆへき事ありとのたまふされはよあるやうあらんとてちかき御
き丁のもとにいたてまつりたりむけにかきりのさまにものし給をきこえをか
まほしきこともおはするにやとておとゝも宮もすこししりそき給へりかちのそ
うともこゑしつめて法華経をよみたるいみしうたうとしみき丁のかたひらひき
あけてみたてまつり給へはいとおかしけにて御はらはいみしうたかうてふし給
へるさまよそ人たにみたてまつらむに心みたれぬへしましておしうかなしうお
ほすことはり也しろき御そに色あひいとはなやかにて御くしのいとなかうこち
たきをひきゆひてうちそへたるもかうてこそらうたけになまめきたるかたそひ
ておかしかりけれとみゆ御てをとらへてあないみし心うきめをみせ給かなとて

物もきこえ給はすなき給へははいいとわつらはしうはつかしけなる御まみを
いとたゆけにみあけてうちまもりきこえ給に涙のこほるさまをみ給はいかゝ
あはれのあさからむあまりいたうなきたまへは心くるしきおやたちの御事をお
ほし又かくみ給につけてくちおしうおほえ給にやとおほしてなに事もいとかう
なおほしいれそさりともしうはおほせしいかなりともかならずあふせあなれ
はたいめむはありなむおとゝ宮などもふかき契ある中はめくりてもたえさなれ
はあひみるほどありなむとおほせとなくさめ給にいてあらずや身のうへのいと
くるしきをしはしやすめ給へときこえむとてなむかくまいりこむともさらに思
はぬを物おもふ人のたましひはけにあくかるゝ物になむありけるとなつかしけ
にいひて

なけきわひ空にみたるゝわかたまをむすひとゝめよしたかへのつまとの給
こゑけはひその人にもあらずかはりたまへいとあやしとおほしめくらすにた
ゝかのみやす所也けりあさましう人のとかくゆふをよからぬものものいひい
つることもきゝにくゝおほしての給けつをめにみすゝ世にはかゝる事こそは
ありけれとうとましうなりぬあな心うとおほされてかくの給へとたれとこそし
らねたしかにの給へとの給へはたゝそれなる御ありさまにあさましとはよのつ
ね也人ゝちかうまいるもかたはらいたうおほさるすこし御こゑもしつまり給へ
ればひまおはするにやとて宮の御ゆもてよせ給へるにかきおこされ給てほと
くうまれ給ぬうれしとおほす事かきりなきに人にかりうつし給へる御ものゝけ
ともねたかりまとふけはひいと物さはかしうてのちのこと又いと心もとなしい
ふかきりなきくわんともたてさせ給けにやたいらかに事なりはてぬれは山のさ
すなにくれやむことなきそうともしたりかほにあせをしのこひつゝいそきまか
てぬおほくの人の心をつくしつる日ころのなこりすこしうちやすみて今はさり
ともとおほすみすほうなどは又ゝはしめそへさせ給へとまつはけうありめつ
らしき御かしつきにみな人ゆるへり院をはしめたてまつりてみこたちかむたち
めのこるなきうふやしなひとものめつらかにいかめしきを夜ことにみのゝしる
おとこにてさへおはすれはそのほどのさほうにきはゝしくめてたしかの宮す所
はかゝる御ありさまをきゝ給てもたゝならすかねてはいとあやうきこえしを
たいいらかにもはたとうちおほしけりあやしうわれにもあらぬ御心ちをおほしつ
ゝくるに御そなともたゝけしのかにしみかへりたるあやしさに御ゆるるまいり
御そきかへなとし給て心みたまへと猶おなしやうにのみあれはわか身なからた
にうとましうおほさるゝにまして人のいひおもはむことなと人にの給へき事な

らねは心ひとつにおほしなけくにと、御心かはりもまさりゆく大将殿は心ちすこしのとめ給てあさましかりしほとのはすかたりも心うくおほしいてられつゝいとほとへにけるも心くるしう又けちかうみたてまつらむにはいかにそやうたておほゆへきを人の御ためいとおしうよろつにおほして御ふみはかりそありけるいたうわつらひ給し人の御なこりゆゝしう心ゆるひなけにたれもおほしたれはことほりにて御ありきもなし猶いとなやましけにのみしたまへはれいさまにてもまたたいめんし給はすわか君のいとゆゝしきまてみえ給御ありさまをいまからいとさまことにもてかしつきこえ給さまおろかならすことあひたる心ちしておとゝもうれしういみしとおもひきこえ給へるにたゝこの御心ちおこたりはて給はぬを心もとなくおほせとさはかりいみしかりしなこりにこそはとおほしていかてかはさのみは心をもまとはし給はんわか君の御まみのうつくしさなどの春宮にいみしうにたてまつり給へるをみたてまつり給てもまつこひしうおもひ出られさせ給にしのひかたくてまいり給はむとてうちなにもあまひひさしうまいり侍らねはいふせさにけふなむうひたちし侍をすこしけちかきほとにてきこえさせはやあまりおほつかなき御心のへたてかなどうらみきこえ給へればけにたゝひとへにえむにのみあるへき御中にもあらぬをいたうおとろへ給へりといひなからものこしにてなとあへきかはとてふし給へる所におましちかうまいりたれはいりて物なときこえ給御いらへ時ゝきこえ給も猶いとよはけ也されとむけになき人とおもひきこえし御ありさまをおほしいつれは夢の心ちしてゆゝしかりしほとのことなときこえ給ついてもかのむけにいきもたえたるやうにおはせしかひきかへしつふゝとのたまひし事とおほしいつるに心うければいさやきこえまほしきこととおほかれとまたいとたゆけにおほしためればこそとて御ゆまいれなどさへあつかひきこえ給をいつならひ給けんと人々あはれかりきこゆいとおかしける人のいたうよはりそなはれてあるかなきかのけしきにてふし給へるさまいとらうたけに心くるしけなり御くしのみたれたるすちもなくはらゝとかゝれる枕のほどありかたきまてみゆればとしころなにことをあかぬことありておもひつらむとあやしきまてうちまもられ給院などにまいりていとうまかてなむかやうにておほつかなからすみたてまつらはうれしかるへきを宮のつとおはするに心ちなくやとつみてすくしつるもくるしきを猶やうゝ心つよくおほしなしてれいのおまし所にこそあまりわかくもてなし給へはかたへはかくもものし給そなときこえをき給ていときよけにうちさうそきていて給をつねよりはめとゝめてみいたしてふし給へり秋のつ

かきめしあるへきさためにて大殿もまいり給へは君たちもいたはりのそみ給事ともありてとの、御あたりはなれ給はねはみなひきつゝきいて給ぬとの、うち人すくなにしめやかなるほとにはかにれいの御むねをせきあけていいたうまとひ給うちに御せうそこきこえ給ほともなくたえいり給ぬあしをそらにてたれもくまかて給ぬれはちもくの夜なりけれとかくわりなき御さはりなれはみな事やふれたるやう也の、しりさはくほと夜中はかりなれは山のさすなにくれのそうつたちもえさうしあへ給はすいまはさりともおもひたゆみたりつるにあさましかれはどの、うちの人もにそあたる所くの御とふらひのつかひなとたちこみたれとえきこえつかすゆすりみちていみしき御心まとひともいとおそろしきまてみえ給御もの、けのたひくとりいれたてまつりしをおほして御まくらなともさなから二三日みたてまつり給へとやうくかはり給こと、ものあれはかきりとおほしはつるほとたれもくいといみし大将殿はかなしきことにことをそへて世の中をいとうき物におほししみぬれはた、ならぬ御あたりのとふらひとも心うしとのみそなへておほさるゝ院におほしなけきとふらひきこえさせ給さまかへりておもたゝしけなるをうれしきせもましりておとゝは御涙のいとまなし人の申すにしたかひていかめしきことゝもをいきやかへり給とさまくゝにのこる事なくかつそこなはれ給事とものあるをみるくもつきせずおほしまとへとかひなくて日ころになれはいかゝはせむとて鳥へ野にゐてたてまつるほといみしけなる事おほかりこなたかなたの御をくりの人ともてらくの念仏そうなとそこらひろき野に所もなし院をはさらにも申さすきさいの宮春宮などの御つかひさらぬ所くゝのもまいりちかひてあかすいみしき御とふらひをきこえ給おとゝはえたちあかり給はすかゝるよはひのすゑにわかくさかりのこにをくれたてまつりてもこよふことゝはちなき給をここの人かなしうみたてまつる夜もすからいみしうのゝしりつるきしきなれといともはかなき御かはねばかりを御なこりにてあか月ふかくかへり給つねの事なれと人ひとりかあまたしもみ給はぬことなれはにやたくひなくおほしこかれたり八月廿日の有明なれは空もけしきもあはれすくなからぬにおとゝのやみにくれまとひ給へるさまをみたまふもことはりにいみしければ空のみなかめられ給て

のほりぬるけふりはそれとわかねともなへて雲ゐのあはれなる哉とのにおはしつきて露まどろまれ給はすとしころの御ありさまをおほしいてつゝなとてつるにはをのつからみなをし給てむとのとかにおもひてなをさりのすさひにつけてもつらしとおほえられたてまつりけむよをへてうとくはつかしき物におも

ひてすきはて給ぬるなとくやしき事おほくおほしつつけられるれとかひなしには
める御そたてまつれるも夢の心ちしてわれさきたゝましかはふかくそそめ給は
ましとおほすさへ

かきりあればうすゝみ衣あさけれと涙そ袖をふちとなしけるとてねむすし
給へるさまいとゝなまめかしさまさりて経しのひやかによみ給つゝ法かい三ま
いふけん大しとうちの給へるおこなひなれたるほうしよりはけなりわか君をみ
たてまつり給にもなにゝしのふのといとゝ露けゝれとかかるかたみさへなから
ましかはとおほしなくさむ宮はしつみいりてそのまゝにおきあかり給はすあや
うけにみえ給を又おほしさはきて御いのりなとせさせ給はかなうすきゆけは御
わさのいそきなとせさせ給もおほしかけさりしことなれはつきせすいみしうな
むなのめにかたほなるをたに人のおやはいかゝおもふめるましてことほり也又
たくひおはせぬをたにさうゝしくおほしつるに袖のうへの玉のくたけたりけ
むよりもあさましけなり大将の君は二条院にたにあからさまにもわたり給はす
あはれに心ふかうおもひなきておこなひをまめにし給ひつゝあかしくらし給
所ゝには御ふみはかりそたてまつり給かの宮す所はさい宮は左衛門のつかさ
にいり給にければいとゝいつくしき御きよまはりにことつけてきこえもかよひ
給はすうしとおもひしみにし世もなへていとはしうなり給てかゝるほたしたに
そはさらましかはねかはしきさまにもなりなましとおほすにはまつたいのひめ
君のさうゝしくてもものし給らむありさまそふとおほしやらるゝよるはみ丁の
うちにひとりふし給にとのゐの人ゝはちかうめぐりてさふらへとかたはらさひ
しくて時しもあれとねさめかちなるにこゑすくれたるかきりえりさふらはせ給
念仏の暁かたなとしのひかたしふかき秋のあはれまさり行風のをと身にしみけ
るかなとならぬ御ひとりねにあかしかね給へるあさほらけのきりわたれるに
菊のけしきはめる枝にこきあをにひのかみなるふみつけてさしをきていにけり
いまめかしうもとてみ給へは宮す所の御てなりきこえぬほとはおほししるらむ
や

人の世をあはれときくも露けきにをくるゝ袖をおもひこそやれたゝいまの
空におもひ給へあまりてなむとありつねよりもいかい給へるかなとさす
かにをきかたうみ給物からつれなの御とふらひやと心うしさとてかきたえを
となうきこえさらむいとおしく人の御なのくちぬへき事をおほしみたるすき
にし人はとてもかくてもさるへきにこそは物し給けめなにゝさることをさた
ゝとけさやかにみきゝけむとくやしきは我御心なから猶えおほしなをすまし

きなめりかし齋宮の御きよまはりもわつらはしくやなどひさしうおもひわつら
ひ給へとわさとある御返なくはなさけなくやとてむらさきのはめるかみにこ
よなうほとへ侍にけるを思給へおこたらずなからつゝましきほどはさらはおほ
ししるらむやとてなむ

とまる身もきえしもおなし露の世に心をくらむほとそはかなきかつはおほ
しけちてよかし御らんせすもやとてたれにもときこえ給へりさとおはするほ
となりければしのひてみ給てほのめかし給へるけしきを心のおにゝしるくみ給
てされはよとおほすもいといみし猶いとかきりなき身のうさ也けりかやうなる
きこえありて院にもいかにおほさむ故前坊のおなしき御はらからといふ中にも
いみしうおもひかはしきこえさせ給てこの齋宮の御ことをもねんころにきこえ
つけさせ給しかはその御かはりにもやかてみてまつりあつかはむなとつねに
の給せてやかてうちすみし給へとたひゝきこえさせ給しをたにいとあるまし
きことゝおもひはなれにしをかく心よりほかにわかゝしき物思をしてつゐに
うき名をさへなかしはてつへきことゝおほしみたるゝになをれいのさまにもお
はせすさるは大かたの世につけて心にくゝよしあるきこえありてむかしより名
たかく物し給へは野の宮の御うつろひのほとにもおかしういまめきたる事おほ
くしなして殿上人どものこのましきなどは朝夕の露わけありくをその比のやく
になむするなときゝ給ても大将の君はことほりそかしゆへはあくまでつき給へ
る物をもし世中にあきはてゝくたり給なはさうゝしくもあるへきかなとさす
かにおほされけり御法事なとすきぬれと正日までは猶こもりおはすならはぬ御
つれゝを心くるしかり給て三位中将はつねにまいり給つゝ世中の御物かたり
なとまとめやかなるも又れいのみたりかはしき事をもきこえいてつゝなくさめき
こえ給にかの内侍そうちわらひ給くさはひにはなるめる大将の君はあないとお
しやをはおとゝのうへないたうかろめ給ひそといさめ給物からつねにおかしと
おほしたりかのいさよひのさやかならさりし秋の事などさらぬもさまゝのす
きことゝもをかたみにくまなくいひあらはし給はてゝはあはれなる世をいひ
くゝてうちなきなともし給けり時雨うちして物あはれなる暮つかた中将の君に
ひ色のなをしさしぬきうすらかに衣かへしていとおゝしうあさやかに心はつか
しきさましてまいり給へり君はにしのつまのかうらんにをしかゝりて霜かれの
せむさいみ給ほど也けり風あららかにふきしくれさとしたるほど涙もあらそふ
心ちして雨となり雲とや成にけんいまはしらすとうちひとりこちてつらつゑつ
き給へる御さま女にてはみすてゝなくならむ玉しひかならすとまりなむかしと

色めかしき心ちにうちまられつゝちかうつゐる給へはしとけなくうちみたれ給へるさまなからひもはかりをさしなをし給これはいますこしこまやかなる夏の御なをしに紅のつやゝかなるひきかさねてやつれ給へるしもみてもあかぬ心ちそする中将もいとあはれなるまみになかめたまへり

雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたとわきてなかもむゆくゑなしやとひとりことのやうなるを

みし人の雨となりにし雲井さへいとゝ時雨にかきくらす比との給御けしきもあさからぬほとしくみゆれはあやしうとし比はいとしもあらぬ御心さしを院なとゐたちての給はせおとゝの御もてなしも心くるしう大宮の御かたさまにもてはなるましきなとかたゝにさしあひたれはえしもふりすて給はてものうけなる御けしきなからありへ給なめりかしといとおしうみゆるおりゝありつるをまことにやむことなくをもきかたはことに思きこえ給けるなめりとみしるにいよゝくちおしうおほゆよろつにつけてひかりうせぬる心ちしてくんしゐたかりけりかれたる下草の中にりんたうなてしこなとのさきいてたるをおらせ給て中将のたち給ぬるのちにわか君の御めのとの宰相の君して

草かれのまかきにのこるなてしこをわかれし秋のかたまとそみるにほひおとりてや御らんせらるらむときこえ給へりけになに心なき御ゑみかほそいみしううつくしき宮は吹風につけてたに木の葉よりけにもろき御涙はましてとりあへ給はず

いまもみてなかゝ袖をくたすかなかきほあれにしやまとなてしこ猶いみしうつれゝなれはあさかほの宮にけふのあはれはさりともしり給らむとしはからるゝ御心はへなれはくらきほとなれときこえ給たえまとをけれとさのものとなりたる御ふみなれはとかなくて御らむせさす空の色したるからのかみに

わきてこのくれこそ袖は露けゝれ物おもふ秋はあまたへぬれといつも時雨はとあり御手などの心とゝめてかき給へるつねよりもみ所ありてすくしかたきほとなりと人もきこえみつからもおほされければ大うち山をおもひやりきこえなからえやはとて

秋きりにたちをくれぬときゝしより時雨ゝ空もいかゝとそおもふとのみほのかなるすみつきにておもひなし心にくしなに事につけてもみまさりはかたき世なめるをつらき人しもこそとあはれにおほえ給人の御心さまなるつれななからさるへきおりゝのあはれをすくし給はぬこれこそかたみになさけもみはつ

へきわさなれ猶ゆへつきよしつきて人めにみゆはかりなるはあまりのなむもい
てきけりたいのひめ君をさはおほしたてしとおほすつれ／＼にて恋しと思らむ
かしとわする、おりなれとたゝめおやなき子をゝきたらむ心ちしてみぬほと
うしろめたくいか、おもふらむとおほえぬそ心やすきわさなりけるくれはてぬ
れは御となふらちかくまいらせ給てさるへきかきりの人／＼御まへにて物語な
とせさせ給中納言の君といふはとしころしのひおほししかとこの御思ひのほと
は中／＼さやうなるすちにもかけ給はすあはれなる御心かなとみたまつる大
かたにはなつかしううちかたらひ給てかうこの日ころありしよりけにたれも

／＼まきる、かたなくみなれ／＼てえしもつねにかゝらすは恋しからしやいみ
しき事をはさる物にてたゝうちおもひめくらすこそたへかたきことおほかりけ
れとの給へはいとゝみななきていふかひなき御事はたゝかきくらす心ちし侍は
さる物にてなこりなきさまにあくかれはてさせ給はむほと思給ふるこそときこ
えもやらすあはれとみわたし給てなこりなくはいかゝは心あさくもとりなし給
哉心なかき人たにあらはみはて給ひなむ物を命こそはかなけれとて火をうちな
かめたまへるまみのうちぬれ給へるほとそめてたきとりわきてらうたくし給し
ちいさきわらはのおやともゝなくいと心ほそけにおもへることほりにみ給てあ
てきはいまはわれをこそはおもふへき人なめれとのたまへはいみしうなくほと
なきあこめ人よりはくろうそめてくろきかさみくわむさうのはかまなときたる
もおかしきすかた也むかしをわすれさらむ人はつれ／＼をしのひてもをさなき
人をみすてすものし給へみし世のなこりなく人／＼さへかれなはたつきなさも
まさりぬへくなむなとみな心なかゝるへきことゝもをの給へといてやいとゝま
ちとをにそなり給はむとおもふにいとゝ心ほそし大との人は人々にきは／＼ほと
をきつゝはかなきもてあそひ物とも又まことにかの御かたみなるへき物などわ
さとならぬさまにとりなしつゝみなくはらせ給けり君はかくてのみもいかてか
はつく／＼とすくし給はむとて院へまいり給御車さしいてゝこせむなとまいり
あつまるほとおりしりかほなる時雨うちそゝきて木の葉さそふ風あはたゝしう
吹はらひたるにおまへにさふらふ人ゝものいと心ほそくてすこしひまありつる
袖ともうるひわたりぬよさはやかて二条院にとまり給へしとてさふらひの人
／＼もかしこにてまちきこえんとなるへしをの／＼たちいつるにけふにしもと
ちむましき事なれと又なくものかなしおとゝも宮もけふのけしきにまたかなし
さあらためておほさる宮の御まへに御せうそこきこえ給へり院におほつかなか
りの給するによりけふなむまいり侍あからさまにたちいて侍につけてもけふま

てなからへ侍にけるよとみたり心ちのみうこきてなむきこえさせむも中／＼に侍へければそなたにもまいり侍らぬとあれはいと、しく宮はめもみえ給はすしつみいりて御返もきこえ給はすおと、そやかてわたり給へるいとたへかたけにおほして御袖もひきはなち給はすみたてまつる人／＼もいとかなし大将の君はよをおほしつゝくることいとさま／＼にてなき給さまあはれに心ふかき物からいときまよくなまめき給へりおととひさしうためらひ給てよはひのつもるにはさしもあるましきことにつけてたに涙もろなるわさに侍をましてひるよなうおもひ給へまとはれ侍心をえのとめ侍らねは人めもいとみたりかはしう心よはきさまに侍へければ院などにもまいり侍らぬ也ことのつてにはさやうにおもむけそうせさせ給へいくも侍るましきおいのすゑにうちすてられたるかつらうも侍かなとせめて思ひしつめての給けしきいとわりなし君もたひ／＼はなうちかみてをくれさきたつほとのだためなさは世のさかとみ給へしりなからさしあたりておほえ侍心まとひはたくひあるましきわさとなむ院にもありさまそうし侍らむにおしはからせ給てむときこえ給さらは時雨もひまなく侍めるを暮ぬほとにとそゝのかしきこえ給うちみまはし給にみき丁のうしろさうしのあなたなどのあきとおりたるなどに女はう卅人はかりおしこりてこきうすきにひ色ともをきつゝみないみしう心ほそけにてうちしほたれつゝゐあつまりたるをいとあはれとみ給おほしすつましき人もとまりたまへはさりともものゝつてにはたちよらせ給はしやなどなくさめ侍をひとへにおもひやりなき女はうなどはけふをかきりにおほしすてつる古郷と思くむしてなかくわかれぬるかなしひよりもたゝ時／＼なれつかうまつるとし月のなこりなかるへきをなけき侍めるなむことはりなるうちとけおはします事は侍さりつれとさりとともつるにはとあいなたのめし侍つるをけにこそ心ほそきゆふへに侍れとてもなき給ぬいとあさはかなる人／＼のなけきにも侍なるかなまことにいかなりともとのとかに思給へつるほとはをのつから御めかるゝおりも侍つらむを中／＼いまはなにをたのみにてかはおこたり侍らんいま御らんしてむとていて給をおととみをくりきこえ給ていり給へるに御しつらひよりはしめありしにかはる事もなければとうつせみのむなしき心ちそし給御丁のまへに御すゝりなとうちゝらして手ならひすて給へるをとりてめをおしゝほりつゝみ給をわかき人々はかなしき中にもほをゑむあるへしあはれなる事ともからのもやまとのもかきけかしつゝさうにもまなにもさま／＼めつらしきさまにかきませ給へりかしこの御てやと空をあふきてなかめ給よそ人にみたてまつりなさむかおしきなるへしふるき枕ふるき衾たれ

とともにかとある所に

なき玉そいと、かなしきねしとこのあくかれかたき心ならひに又霜の花しろしとある所に

君なくてちりつもりぬるとこなつの露うちはらひいく夜ねぬらむ一日の花なるへし枯てましれり宮に御らんせさせ給ていふかひなき事をはさる物にてかゝるかなしきたくひ世になくやはと思なしつゝ契なかゝらてかく心をまとはすへくてこそはありけめとかへりてはつらくさきの世を思やりつゝなむさまし侍をたゝ日ころにそへて恋しさのたへかたきとこの大将の君のいまはとよそになり給はむなんあかすいみしく思たまへらるゝ一日ふつかもみえ給はすかれゝにおはせしをたにあかすむねいたく思侍しをあさゆふのひかりうしなひてはいかてかなからふへからんと御こゑもえしのひあへ給はすない給におまへなるおとなゝしき人などいとかなくさとうちなきたるそゝろさむきゆふへのけしき也わかき人ゝは所ゝにむれあつゝをのかとちあはれなる事ともうちかたらひてとのゝおほしのたまはするやうにわか君をみたてまつりてこそはなくさむへかめれと思ふもいとはかなきほどの御かたみにこそとてをのゝあからさまにまかてゝまいらむといふもあればかたみにわかれおしむほどをのかしゝあはれなる事ともおほかり院へまいり給へはいといたうおもやせにけりさうしにて日をふるけにやと心くるしけにおほしめしておまへにて物なとまいらせ給てとやかくやとおほしあつかひきこえさせ給へるさまあはれにかたしけなし中宮の御かたにまいり給へれば人ゝめつらしかりみたてまつる命婦の君して思つきせぬ事ともをほとふるにつけてもいかにと御せうそこきこえ給へりつねなき世は大かたにもおもふ給へしりにしをめにちかくみ侍つるにいとほしきことおほく思給へみたれしもたひゝの御せうそこになくさめ侍てなむけふまでもとてさらぬおりたにある御けしきとりそへていと心くるしけなりむものうへの御そににひ色の御したかさねえいまき給へるやつれすかたはなやかなる御よそひよりもなまめかしさまさり給へり春宮にもひさしうまいらぬおほつかなさなときこえ給て夜ふけてそまかて給二条院にはかたゝはらひみかきておとこ女まちきこえたり上らうともみなまうのほりてわれもゝとさうそきけさうしたるをみるにつけてもかのゑなみくむしたりつるけしきともそあはれにおもひいてられ給御さうそくたてまつりかへてにしのたいにわたりたまへり衣かへの御しつらひくもりなくあさやかにみえてよきわか人わらはへのなりすかためやすくとゝのへて少納言かもてなし心もとなき所なう心にくしとみ給ひめ君いと

うつくしうひきつくろひておはすひさしかりつるほとにいとこよなうこそおとなひ給にけれとてちいさきみき丁ひきあけてみたてまつり給へはうちそはみてわらひ給へる御さまあかぬ所なしほかけの御かたはらめかしらつきなとたたかの心つくしきこゆる人にたかふ所なくなり行かなとみ給にいとうれしちかくより給ておほつかなかりつるほどの事ともなときこえ給て日ころの物かたりのとかにきこえまほしけれといま／＼しうおほえ侍れはししことかたにやすらひてまいりこむ今はとたえなくみたてまつるへければいとはしうさへやおほされむとかたらひきこえ給を少納言はうれしときく物から猶あやうく思きこゆやむことなきしのひ所おほうか、つらひ給へれば又わつらはしきやたちかはり給はむと思ふそにくき心なるや御方にわたり給て中将の君といふ御あしなとまいりすさひておほとのもりぬあしたにはわか君の御もとに御ふみたてまつり給あはれなる御返をみ給にもつきせぬ事とのみなむいとつれ／＼になかめかちなれとなとなき御ありきものうくおほしなれておほしもたゝれすひめ君のなに事もあらまほしうと、のひはて、いとめてたうのみみえ給をにけなからぬほとにはたまなし給へればけしきはみたる事なとおり／＼きこえこゝろみ給へとみもしり給はぬけしき也つれ／＼なるまゝにたゝこなたにてこうちへんつきなとしつゝ日をくらし給に心はへのらう／＼しくあいきやうつきはかなきたはふれことのなかにもうつくしきすちをしいて給へはおほしはなちたる年月こそたゝさるかたのらうたさのみはありつれしのひかたくなりて心くるしけれといかゝ有けむ人のけちめみたてまつりわくへき御中にもあらぬにおとこ君はとおき給て女君はさらにおき給はぬあしたあり人ゝいかなれはかくおはしますならむ御心ちのれいならすおほさるゝにやとみたてまつりなけく君はわたり給とて御すゝりのほこを御帳のうちにさしいれておはしにけり人まにからうしてかしらもたけ給へるにひきむすひたるふみ御枕のもとにありなに心もなくひきあけてみ給へは

あやなくもへたてけるかなよをかさねさすかなれしよるの衣をとかきすさひ給へるやう也かゝる御心おはすらむとはかけてもおほしよらさりしかはなとてかう心うかりける御心をうらなかつたのもしき物におもひきこえけむとあさましうおほさるひるつかたわたり給てなやましけにし給らむはいかなる御心ちそけふはこもうたてさう／＼しやとてのそき給へはいよ／＼御そひきかつきてふし給へり人々はしりそきつゝさふらへはより給てなどかくいふせき御もてなしそおもひのほかに心うくこそおはしけれな人もいかにあやしとおもふらむと

て御ふすまをひきやり給へればあせにをしひたしてひたいかみもいたうぬれ給へりあなうたてこれはいとゆゝしきわさそよとてよろつにこしらへきこえ給へとまことにいとつらしと思給て露の御いらへもし給はすよしゝさらにみえたてまつらしいとはつかしなとえし給て御すゝりあけてみ給へと物もなければわかの御ありさまやとらうたくみたてまつり給て日ひとひいりゐてなくさめきこえ給へとけかたき御けしきいとゝらうたけなりそのよさりゐのこもちゐまいらせたりかゝる御思のほとなればことゝしきさまにはあらてこなたはかりにおかしけなるひわりこなどはかりを色ゝにてまillerるをみ給て君みなみのかたにて給てこれみつをめしてこのもちゐかうかすゝに所せきさまにはあらてあすのくれにまいらせよけふはいまゝしき日也けりとうちほゝゑみての給御けしきを心とき物にてふと思よりぬこれみつたしかにもうけたまはらてけにあいきやうのはしめは日えりしてきこしめすへき事にこそさてもねのこはいくつかつかうまつらすへう侍らむとまめたちて申せはみつかひとつかにてもあらむかしとの給に心えはてゝたちぬ物なれのさまやときみはおほす人にもいはて手つからといふはかりさにてそつくりゐたりける君はこしらへわひ給ていまはしめぬすみもてきたらむ人の心ちするもいとおかしくてとし比あはれとおもひきこえつるはかたはしにもあらさりけり人の心こそうたである物はあれいまは一夜もへたてむ事のわりなかるへき事とおほさるの給しもちゐしのひていたう夜ふかしてもてまいれり少納言はおとなしくてはつかしくやおほさむと思やりふかく心しらひてむすめの弁といふをよひいてゝこれしのひてまいらせ給へとてかうこのはこをひとつさしいれたりたしかに御枕かみにまいらすへきいはひの物に侍あなかしこあたになといへばあやしとおもへとあたなる事はまたならはぬ物をとてとれはまことにいまはさるもしいませ給へよゝもましり侍らしといふわかき人にてけしきもえふかく思よらねはもてまいりて御枕かみの御き丁よりさしいれたるを君それいのきこえしらせ給らむかし人はえしらぬにつとめてこのはこをまかてさせ給へるにそしたしきかきりの人ゝおもひあはする事ともありける御さらともなといつのまにかしいてけむけそいときよらしでもちゐのさまもことさらひいとおかしうとゝのへたり少納言はいとかうしもやとこそ思きこえさせつれあはれにかたしけなくおほしいたらぬ事なき御心はへをまつうちなかれぬさてもうちゝにのたまはせよなかの人もいかにおもひつらむとささめきあへりかくて後はうちにも院にもあからさまにまいり給へる程たにしつ心なくおもかけに恋しければあやしの心やとわれなからおほさるか

よひ給し所くよりはうらめしけにおとろかしきこえ給なとすれはいとおしとおほすもあれと新手枕の心くるしくてよをやへたてむとおほしわつらはるれはいと物うくてなやましけにのみもてなし給て世中のいとおほゆるほどすくしてなむ人にもみえたてまつるへきとのみいらへ給つゝすくし給いまきさきはみくしけ殿猶この大将にのみ心つけたまへるをけにはたかくやむことなかりつる方もうせ給ぬめるをさてもあらむになとかくちおしからむなどおととの給にいとにくしと思ひきこえ給て宮つかへもおさくしくたにしなし給へらはなとかあしからむとまいらせたてまつらむことをおほしはけむ君もをしなへてのさまにはおほえさりしをくちをしとおほせとたゝいまはことさまにわくる御心もなくてなにかはかはかりみしかからめ世にかくておもひさたまりなむ人のうらみもおふましかりけりといとゝあやうくおほしこりにたりかのみやす所はいとくおしけれとまことのよるへとたのみきこえむにはかならず心をかれぬへし年ころのやうにてみすくし給はゝさるへきおりふしにもものきこえあはする人にてはあらむなどさすかにことのほかにはおほしはなたすこのひめ君をいまゝてよ人もその人としりきこえぬも物けなきやう也ちゝ宮にしらせきこえてむとおもほしなりて御もきの事人にあまねくはの給はねとなへてならぬさまにおほしまうくる御よういなどいとかたけれと女君はこやなうとみきこえ給て年ころよろつにたのみきこえてまつはしきこえけるこそあさましき心なりけれとくやしうのみおほしてさやかにもみあはせたてまつり給はすきこえたはふれ給もくるしうわりなき物におほしむすほゝれてありしにもあらずなり給へる御ありさまをおかしうもいとおしうもおほされて年ころおもひきこえしほいなくなれはまさらぬ御けしきの心うきことゝうらみきこえ給ほとにとしもかへりぬついたちの日はれいの院にまいり給てその内春宮などにもまいり給それより大とのにまかて給へりおとゝあたらしき年ともいはすむかしの御事ともきこえいて給てさうくしくかなしとおほすにいとゝかくさへわたり給へるにつけてねむしかへし給へとたへかたうおほしたり御年のくはゝるけにやものくしくさへそひ給てありしよりけにきよらにみえ給たちいてゝ御かたにいり給へれば人々もめつらしうみたてまつりてしのひあへすわかきみたてまつり給へはこよなうおよすけてわらひかちにおはするもあはれ也まみくちつきたゝ春宮の御おなしさまなれは人もこそみたてまつりとかむれとみ給御しつらひなともかはらすみそかけの御さうそくなとれいのやうにしかけられたるに女のかならはぬこそはへなくさうくしくはへなけれ宮の御せうそこにてけふはいみしく思給

へしのふるをかくわたらせ給へるになむ中くなときこえ給てむかしにならひ
侍にける御よそひも月ころはいとゝ涙にきりふたかりて色あひなく御らむせら
れ侍らむと思給れとけふはかりは猶やつれさせたまへといみしくしつくし給
へる物とも又かさねてたてまつれ給へりかならずけふたてまつるへきとおほし
ける御したかさねは色もをりさまよのつねならす心ことなるをかひなくやは
とてきかへ給こさらましかはくちをしうおほさましと心くるし御返に春やきぬ
るともまつ御らむせられになんまいり侍つれと思給へいてらる事おほくてえ
きこえさせ侍らす

あまた年けふあらためし色ころもきては涙そふるこゝちするえこそおもひ
たまへしつめねときこえ給へり御返

あたらしきとしともいはすふる物はふりぬる人の涙なりけりをろかなるへ
きことにそあらぬや